

2019年6月2日（日）「逃げる目的」

マタイ 24:15-22

15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべきもの』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。) 16 そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。 17 屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。 18 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。 19 だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。 20 ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。 21 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。 22 もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。

【序論】

聖書を読んでいて、よく不思議に思いますのは、ちょうど学んでいる箇所と関連する聖句にピタリと出会う経験をすることです。実は、今日の箇所に取り組んでいたとき、私は妻と一緒にダニエル書を通読していました。そして、この説教を書こうとしていたまさにその日、ダニエル書を読み終えました。今日の箇所の冒頭ではダニエル書の聖句が引用されており、私はこの預言書全体の文脈から主の御言葉を捉えることができ、深く感謝した次第です。こういうことはよくありますし、聖書に親しんでいくときに誰でも味わうことになるでしょう。聖書は全体が関連し合っており、一つのゴールに向かっています。それは、終末における世界の贖いであり、その新天新地をもたらすメシヤ、イエス・キリストです。聖書全体が主イエスを証しし、待ち望み、預言しているのです。

【本論】

今日の箇所は、3節の弟子たちの質問（お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか）への答えとして捉えると理解しやすい。4-14節は一面脱線のように、苦難の時代におけるキリスト者の心構えが教えられていました。「惑わされるな」「うろたえるな」「最後まで耐え忍べ」と。そして、15節からは具体的に「世の終わりの前兆」について語られていきます。

本論 1. 荒らす憎むべきもの

それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべきもの』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)(24:15)

「荒らす憎むべきもの」という表現は、ダニエル書に3回出てきます。

- ・ 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。(9:27)
- ・ 彼の軍隊は立ち上がり、聖所ととりでを汚し、常供のささげ物を取り除き、荒らす忌むべきものを据える。(11:31)
- ・ 常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。(12:11)

これは具体的には、紀元前2世紀に起きた、シリアの王アンティオコス・エピファネスによるエルサレム神殿の冒瀆を指すようです。ダニエル書というのは、黙示文学¹的な色彩が濃く、悪しき者の台頭と、それをたちどころに滅ぼす神の介入と、新しい世界の支配とが描かれている。黙示文学は、ユダヤ人の迫害の時代に特に流行しました。ダニエル書を黙示文学そのものとは捉えずとも、その文学様式には多くの共通項があります。黙示文学は、実際の出来事が起きた後、それを預言のように書き記し、過去の信仰偉人の名前を著者名として付けることによって権威をもたせる傾向がありました。しかし、恐らくダニエル書の黙示的部分は、「真の啓示」としてダニエルに未来の出来事が示されたものでしょう。

ここに登場するアンティオコス・エピファネスは(在位：前175～前163年)、プトレマイオス王朝との戦いに勝利を収め、エジプト征服の寸前までいったほどの武人でした。彼はユダヤに対して圧政をもって臨み、エルサレムを破壊し、多くの敵対者を処刑しました。彼はユダヤ人を徹底的に弾圧し、聖所における犠牲の奉



¹ 「およそ前2世紀頃から紀元1世紀にかけて、ユダヤ教およびキリスト教圏において書かれ、世の終りと天上の場景についての黙示を記した一群の文書を指して言う。聖書の正典中、これに類似した内容と性格を持つのは、ダニエル書とヨハネの黙示録である。」

「黙示文学の内容はもちろん多種多様であるが、共通した特色、性格はおおよそ次のような点にある。古い時代の信仰的偉人の名を借り(偽名性)、その人物が神から黙示(覆いを取り除かれて、隠れていた秘義が明らかにされる)を与えられるという形式をとっている。」

(新聖書辞典 pp.1254-1255)

敵の禁止、安息日律法を守ることの禁止、割礼の禁止、律法の書の所持の禁止など、ありとあらゆる宗教的「核」を潰しました。さらに、かさむ戦費をまかなうために、エルサレム神殿の財宝にまで手をつけ、ついにはギリシャ神ゼウスの祭儀をヤハウエの祭壇で行なわせたのです（前 167 年）。この、ユダヤ人にとって許し難い冒瀆に対し、ユダ・マカバイオスが立ち上がり、前 166 年に決死の抵抗運動を興し、3 年の戦いを経て神殿を奪還します。この「マカベア戦争」は、その後さらに前 142 年まで続きます。

主イエスがダニエル書の「**荒らす憎むべきもの**」を引用なさるとき、それは過去に起きたこの事件が念頭にあることは間違いないでしょう。しかし、主は世の終わりの前兆として、再びこのようなことが起きると言われるのです。近未来の出来事としては、ポンテオ・ピラトがカイザリヤからエルサレムへ軍隊を派遣し、皇帝の肖像がついた軍旗をエルサレム市内に据えようとしてしました。しかし、偶像を拒否するユダヤ人の決死の抵抗によって、この計画は実施には至りませんでした。これは一面「荒らす憎むべきもの」の安置と言えるのかも知れません。あるいは、紀元 70 年のローマ軍によるエルサレム神殿破壊こそそれだと主張する人もいます。

ただ、主イエスが「『**荒らす憎むべきもの**』が、**聖なる所に立つのを見たならば**」と言われるとき、これは極めて抽象的、象徴的な表現に聞こえるのです。恐らく、マタイ福音書が書かれた当時の厳しい政治的・社会的状況によって、それが誰を指すのか、明言することが避けられたのでしょう。敢えて明確化しないことによって、この言葉は幅広い意味をもつようになります。つまり、主イエスの時代から始まった「終末の時代」全般において、度々起こる類似した出来事の一つ一つに適用されてくるのです。権力が獣化するとき、人間は神の位置に自らを置き、多くの人に崇拜を求めます。

本論 2. すべてを捨てて逃げよ

そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そう

と下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。（24:16-18）

主イエスは弟子たち（信者全般）に向けて、「『**荒らす憎むべきもの（反キリスト）**』が、**聖なる所に立つのを見た**」なら、それこそがサインだと言われます。逃げるべき時が来たのです。「ユダヤ」という地名が出てくるところに、読者は強いローカル色を感じます。主は第一に、エルサレムを中心に起きる危機を想定して語っておられる。それと同時に、これは現代日本も含む、すべての終末時代の教会が経験する危機をも言い表しているでしょう。「山」は、敵から身を隠して生き延びるのに安全な場所です。「より安全な場所へ行け」という指示にほかなりません。

次に、「**屋上にいる者**」。当時のパレスチナの家屋は、屋根が平らで、夕涼み、夕食、団欒、就寝、祈りの場所として用いられました。あまり危機感なくのんびりと過ごしている人のことが想定されている。当時の家には外階段が付いていて、いちいち家の中に入らないでも道に出ることができました。危機的な状況になったら、もはや家に入って、お金など貴重品を取り出しではいけない。とにかく逃げろと言われるのです。

「**畑にいる者**」。「屋上にいる者」とは対照的にあくせく働いている人たちのことが想定されています。労働で汗を流してはいるが、着替えに帰っている暇はない。「着物」（上着）は、当時の人々にとって重要なもので、夜寝るときに不可欠でした。それすらも取りに行つてはいけないと。

人間は死に瀕するとき、その人生において何を大切にしてきたかが分かります。「危機的な状況は、私たちが本当はどのような種類の人間かを、この上もなく正確に示す」（ロイドジョンズ『神はなぜ戦争をお許しになるのか』p.40）。私たちにとって、地上で何よりも大切なものは、やはり命でしょう。お金、家、財産といったものはもちろん大切ですが、命の価値には到底及びません。また、私たちにとって、家族や友人の命も大切です。場合によっては、そのために自分の命を失うこともあるでしょう。そして、それにも増して大切なのは神との関係であります。礼拝できること、賛美できること。すべてを失ったとしても、最後に残るものはこれではないでしょうか。

ここで注目すべきことは、主イエスが神殿の聖所がたとえ汚されたとしても、それに気を留めてはいけないと言っておられることです。かつてのマカベア戦争では、神殿を奪還するために血みどろの戦いが繰り広げられました。しかし、主はそのような戦いをキリスト者には求め給わないのです。むしろ、こう言っておられるようです。「宗教的価値を失った神殿にはもはや意味はない。それは見捨てて逃げよ」と。墮落した宗教しかない神殿は、奪還・再興の意味はなく、むしろもっと重要なことは信者が生き残ることだと言われているのです。

「逃げよ」という言葉を聞くとき、思い起こす記事があります。それは、ソドムとゴモラが滅ぼされるとき、振り向いたために塩の柱となってしまったロトの妻です（創世記 19:26）。彼女にとって大切なのは「この世のもの」であった。神の命令以上に「この世」を愛していたのです。私たちはどうか。危機的な状況のとき、主イエスのことばをただ思い出さなくてはなりません。「とにかく逃げよ！」「後ろを振り向くな！」。しかし、主は逃げるのが困難な状況にある人々も想定しておられます。

だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。（24:19-20）

幼子がいると、手を引いては速く走れませんし、負ぶって逃げるのも困難です。身重で

あると動くことすらできないかも知れません。しかし、そういう人を放っておくことはできない。「身重の女」「乳飲み子を持つ女」というのは、自由に走り回れない人の代表であり、もちろん障害者や老人も含むわけです。

「冬や安息日にならぬよう祈りなさい」。「冬」は雨季であるため、山岳地帯に降った雨が流れてきて、道がどろどろになる。極めて走りにくい。また、「安息日」はユダヤ人にとって移動できる距離が決まっていたため（半マイル／約 800 メートル）、この安息日律法を大切にしている人々にとっては逃げるに逃げられない状況となる。主はそのような日に災いが来ないよう祈れとお命じになります。信仰者の祈りが如何に重要であるかが分かるでしょう。私たちがこのことを祈り、世界をとりなしていくときに、神はそれに応えてくださるということです。

本論 3. 次の時代の種となるために

そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。（24:21）

「ひどい苦難」は、歴史上すでに何度も起きているではありませんか。ナチスによる 600 万人のユダヤ人虐殺。スターリンによる大規模な粛清は 1800 万人の死者を出しました。そして、日本では広島・長崎に落とされた二度の原爆。しかし、まだ本当の世の終わりは来ていません。終末の時代は、螺旋階段のように様々な事件を経て、究極的な終わりに近づいていくのです。

もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。（24:22）

「日数が少なくされる」。これもまた、聖徒たちの祈りを神が聞いてくださることによるのでしょう。神は「選ばれた者」が死滅することを願ってはおりません。なぜなら、その聖徒の存在が、この地への神の審きを和らげているからです。聖徒は生き残らなくてはならない。それは、次の時代を築き上げていくためです。新たな時代に福音の種を蒔く者がいなくなってしまうのです。ですから、キリスト者のために、この歴史は左右されていると言ってもよい。聖徒が「救われる」ため、つまり患難に耐えることができるように、神は憐れみをもってその時代を縮めてくださるということです。

主イエスが、「荒らす憎むべきものが現れたなら逃げよ」と言われるところに、「戦わない」消極性を感じ取る読者もいるかも知れません。しかし、主が逃げよと言われるのは、私たちが次の時代を担っていくためです。「積極的逃亡」とでも言いましょうか。私たちは福音の種を蒔き、尚も伝道するために生き残らなくてはならない。

【結論】

今日の箇所を中心には「逃げる」というテーマがあります。「いつ逃げるのか」「どのように逃げるべきか」「なぜ逃げなくてはならないのか」。聖徒が「逃げる」状況には、常に神との関わりがあります。「神に従って」「神に向かい」「神を宣べ伝えるために」逃げるのです。私たちの人生の目的は、神を愛すること。この世のものに目を奪われず、神を神として生き続けることです。そして、その神を証しすることであります。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。（ローマ 14:8）

【祈り】

私たちをも時代の担い手としてくださる天の父なる神様。この終末の時代にあって、私たちを希望の光としてくださっていることを感謝いたします。時代は悪くなり、「荒らす憎むべき者」の台頭はあちこちに見られます。その終末的な兆しを私たちが見逃すことがありませんように。そして、永遠の神の国を証しするために、生き残ることができますように。私たちを、世をとりなす器として、いよいよ聖め整えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

世の終わりの近さを、様々な事象を通して、聖徒に示し給う、父なる神の愛。

危機的な状況にあって、敢えて血を流す戦いに向かうのではなく、生き残るために逃げることを勧め給いし、主イエス・キリストの恵み。

次の時代を担う者として、教会をいよいよ聖め分かち給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。